岡山大学教育学部
附属教育実践総合センター研究年報　第２号　1999年抜刷

アメリカの小学校

The basic school　実践校の
ケースレポート

青木多寿子

アメリカの小学校

The basic school[1]実践校のケースレポート

青木多寿子

(1)はじめに

著者の子どもたちを1年間アメリカの小学校に通わせる機会を得た。子どもたちを学校に通学させる前、私はアメリカの学校教育には全く期待を持っていなかった。その理由は、私が大学2年生のころ、比較教育学のゼミで読んだ本の中に、児童、生徒の低学力、貧富の大きさ、多種多様な人種の混在、教師のレベルの低さに悩んでいるアメリカの学校教育が紹介されていたからである。加えて、私の心のどこかに、「日本の学校教育のレベルは高い」「日本の学校教師の技量は優れている」という気があった。これらの意識の積み重ねの結果、私はほとんど何も期待もせずに、子どもたちをアメリカの小学校に通わせたのである。

しかし、実際に子どもたちを学校に通わせてみて、私の考えは間違っていたことに気づいた。確かに、算数の計算力は日本の小学生のスキルが優れている。しかし、個々の子どもたちの個性に注目し、子どもたちの人格形成を目指し、それらをベースに学校の教育目標を設定し、カリキュラムと教育目標を徹底的に一貫させる態度は、日本は到底及ばない。加えて、学習内容も、子どもの発達段階にあわせる工夫がなされているように感じた。調べてみると、アメリカは近年、国を挙げての教育改革を成し遂げていた。大学時代に私が調べた教育とは大きく違う教育を行っていたのである。そして著者の子どもたちが通った小学校は、アメリカでの教育改革の成果の一つである Boyer(1995)の The Basic School という考えを採用して実践に応用している小学校だった。

Basic School とは、小学校を子どもたちにとって本当に役立つものにするため、小学校を新たな視点で捉え直した概念である。そこでは、生涯にわたり、総合的に役立つ方略を身に付けさせることを目指している。そのために、①「コミュニティ(community)」を形成するような人と人の結びつき、②学校の各要素を結び付ける「一貫性(coherence)のあるカリキュラム」、③豊かな学習の「気風(climate)」を作るように、効果的にクラスや学校の器材を結び付けること、④「個性(character)」を作るために生涯教育と結び付けること、のどれも「C」という文字で表せる4つの「connections（つながり）」を学校教育に積極的に取り入れている。そして、実際本当に、この学校の実践には、教育目標、教科や教科外活動、学校が目指す人格特性まで、教育に一貫性が見られるのである。

そこで本稿では、著者の子どもたちが通ったトマホークリッジ小学校（Tomahawk Ridge）を例に、「学校の各要素を結びつける一貫性のあるカリキュラム」に焦点を絞り、Basic School 実践校の実践ケースを紹介することにする。

---

[1] アメリカは1980年代に国の教育レベルを上げるための本格的な教育改革に取り組み始めた。The Basic School(Boyer,1995)の考えも、その教育改革の一環で生まれた考えの一つである。アメリカの教育改革の結果、学校の平均的な学力は向上し、学校の教師への信頼性は回復した。Boyer(1995)は、この教育改革で、アメリカの学校教育は大きく改善され、発展したことは疑いがないとしている。さらに Boyer(1995)は、今日では、アメリカの学校の中で最も良い学校は、世界の中でも秀でた教育を行っていると確信しているとまで述べている。

(2) ブルーバレー学区

トマホークリッジ小学校は、カンザス州、カンザスシティの郊外、オーバーランドパーク市（Overland Park）にある。この地域の学校教育行政地区は、ブルーバレー学区（Blue Valley）である。この学区は、全米一早いスピードで拡大している学区とのことである。競争社会のアメリカで、学区が拡大していることは、この学区の教育が優れており、転入者が多いことを意味している。この学校の運営がいかにうまくいっているかは、学区の事務局（Community Relation Office）が発行している資料１に示すデータを見るとよくわかる。

資料１：ブルーバレー学区に関するデータ
（1999-2000）

小学校１７校（幼稚園年長―5年生まで）
中学校７校（6年生から８年生まで）
高校３校（9年生から１２年生まで）

・生徒のドロップアウト率；0.7%
・生徒：コンピュータの比率＝３：１
・毎日出席する生徒の割合；96.8%
・授業時間；小学校、8:35a.m.―3:40p.m.
　　中学校、7:45a.m.―2:50p.m.
　　高校、　7:45a.m.―2:45p.m.

教員の平均給料＄42,557。専任教員の 68.4%が修士以上の学位を持っている

資料１によると、この地域７年生から１２年生までの子どもたちにおける学校のドロップアップ率は.０７％と極めて低く、毎日学校に来ている子どもたちの割合は、全体で 96.8%と極めて高い。この低いドロップアップ率と子どもたちの出席率は、アメリカでは、高校入試による選抜がないのに、ほとんどの学生が高校を卒業することを考え合わせると驚くべき数値と言えよう。加えて教員の修士号以上の学位所有率が 68%[2]。これも驚く数値となっている。

この学区では、学区が発行しているパンフレットに、学校の教育方針と学校の使命に関するをキャッチフレーズを明記している。そのキャッチフレーズとは、「私たちは、おのおのの子どもたちが、それまで期待されていた以上にする」というものである。日本では、市の教育委員会の抱負、教育方針を見たことがない。この点、転入者だった私から見ると、市の教育行政のデータに加えて、教育の方針が明確に掲げてあることでとても安心できた。日本でも、教育行政に関するデータや教育目標を開示した資料があっても良いのではないかと感じた。

興味深いことに、このパンフレットには、「私たちの学区を選んで下さい」とも書いていた。カンザス州では、学区がパンフレットを作成して、入学者の勧誘を行っているのである。よい学校を作れば住人が集まり、市が豊かになる。小学校の選択にも、アメリカ社会の競争原理が適応されているのである。

(3) トマホークリッジ小学校（Tomahawk Ridge Elementary School）

ブルーバレー学区の１つの小学校がトマホークリッジ小学校である。この小学校は 1988 年に作られ、昼間は小学校、夕方からは地域のコミュニティ・センター[3]として利用されている。新しい学校であることから、アメリカの教育改革の成果をふんだんに取り入れることができたのではないかと考えられる。

この学校では、子どもたちが毎日学校からのプリントを持って帰るバインダーを独自に作成している。

---

[2] 教育改革の際、教員の再教育も重視された。学校での授業終了後、夕方から開講される大学院に通っている教師も多い。

[3] 正方形型の建物の中央には、広い図書館が配置されている。各クラスは図書館に隣接していることになる。図書館には文学書だけでなく、資料の書架も多い。コンピュータも数台ある。社会科の授業ではこの図書館を頻繁に使用する。図書館やインターネットを頻繁使う授業は、生涯学習を見越した授業設定であると思われる。

ス（事務、カウンセリング、保健室、課外活動など）が記載されている。わからないことがあれば、このバインダーを見るとどうすればよいかがわかり、大変便利である。日本の学校にもこのようなものがあれば、学校全体の流れや何をどこに尋ねればよいかが明確なので、学校と家庭の連携も取りやすいと考えられる。

資料２は、このバインダーの中から抽出した、この学校のビジョンである。この校長先生のメッセー

資料２ ： 校長のメッセージ

トマホーク小学校は、子どもたちの住む地域社会によく適応し、地域にとって生産的な人物になるのに必要な教育的、社会的、感情的、そして物理的な技術を提供する。

小学校教育は形式的教育や形式的な場所の中で最も柔軟性の高い。この段階では、システムではなく、子どもたちに焦点を絞って、子どもたちが知識を身につけ、直面する問題を解決し、アイディアを生産するような、生涯学習し続ける生涯学習者になるコネクション作りを援助してやる必要がある。トマホークリッジ小学校では、これを実現化するため、子どもたちが基本技能を身につける学習を発展させてきた。そして、それを身につけるだけでなく、それを用いて、より大きな概念を獲得し、応用できるように援助するカリキュラムを発展させてきた。基礎段階である小学校での組織的な原理は、次の４つである。

・一貫性のあるカリキュラム（A curriculum with coherence）
・学習する風潮（A climate for learning）
・学習のコミュニティ（A community for learning）
・倫理的、道徳的な特性への関わり（A commitment of character）

Boyer によると、これらの柔軟な教育を実現するには、基本的な基盤が必要だとしている。子どもたちを管理する基盤の計画は、７つの徳目から成っており、これは人格への関わりを基本としたものである。これらの徳目は、

・尊敬（respect）
・責任感（responsibility）
・忍耐強さ（perseverance）
・奉仕（giving）
・自己統制（self-discipline）
・正直さ（honesty）
・共感（compassion）
・勇気（courage）

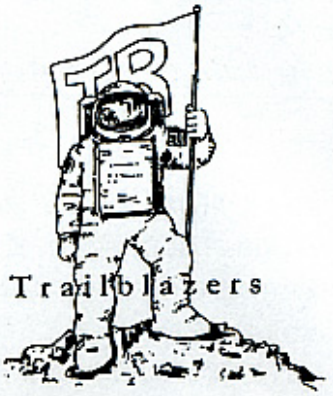
である。ブルーバレー学校区では、これらに８番目の徳目を付け加えている。それは、「反省する勇気」というものである。つまり、生徒達が反対意見に出会ったとき、正しいと思うことをやる意志を発展させる事ができることを願ったものである。

これらの徳目は、我々のコミュニティだけでなく、家庭の中ででも、毎日の生活で子どもたちに少しずつ教え込む人格特性と同じものであると信じている。したがって、我々はより親切で暖かみがあり、より責任感のある社会を作るという、より大きな目標のために、児童の両親と児童の家族と、一緒に助け合って働いていることになるのでる。

校長　Dr. Michel A. Sportsman

ジを一読すると、日本の教育にない視点があるように思える。まず、「より親切で、より責任ある地域の住人を育てるのだ」という明確な視点、「学校が目指すものと家庭教育で目指すものは同じである」という視点、「親や家族と力を合わせて子どもたちを健全に教育しよう」とする視点、である。アメリカには、民族、宗教が入り乱れており、考え方の違う人たちが多々混在する。それらの多様な人たちをまとめて教育するには、「地域社会のよりよい住人の育成」という目標の設定が最良のものなのかもしれない。しかし考えてみると、この目標設定は、学校教育の中で、一番基本的で、一番重要な目標なのではなかろうか。どんな考え方の人であれ、どんなに違った意見を持つ人であれ、どんな背景を持つ人であれ、自分が住む地域を「より親切な地域」「より責任のある地域」にしたいと願っているに違いない。

資料３　トマホークリッジ小学校のシンボルマーク



この点について、小学校の校長先生から次のようなお話を伺った。「学校を運営する経費は、市から供給されているのです。市のお金を使っている以上、市に役に立つ人間を育てることが学校の使命なのです。地域に役立つ住民を育てるには、地域独自のカリキュラムも必要だし、地域の住人の協力も必要なのです」。

この話を伺った際、一瞬、全国共通の学習指導要領を用い、全国どこでも同じ授業を行う日本の学校教育と、アメリカ全体よりも地域を重視するアメリカの学校教育では、システムが違うような気がした。しかし考えてみると、日本の小学校も地域のお金を使っているのではなかろうか。つまり、どちらも市のお金を使っているけど、「より責任感ある地域」、または「より親切な地域」を作ろうという、自分たちが生活している地域を重視する発想が日本に希薄なのではなかろうか。このように考えると、日本の小学校とは、教育目標、作りたい人物像、地域社会における位置づけなど、多くのもの非常にあいまいだとと感じられる。

ところで、この学校のシンボルマークは、宇宙服を着た人が「ＴＲ」というトマホークリッジの旗をもって宇宙の星に立っている絵である（資料３）。その絵には「Trailblazers(開拓者達)」と書いている。新たな道を切り開く開拓者には、人種、民族、性別などはどうでもよいものである。個人の過去の歴史、個人の持っている個性として尊重して敬意を払い、多様な個性を生かして未来のよりよい社会を目指して行こうという姿が象徴的に現れているように見える。明確な目標を定めて、未来に向かって学校を運営しているアメリカの小学校。例年の慣行と過去の経験、実績で学校が運営されがちな日本の小学校。このシンボルマークには両者の違いを現しているように感じた。

(4) トマホークリッジ小学校の徳目

トマホークリッジ小学校の属するブルーバレー学区は、８つの徳目を明確に定めている。これは、資料２の校長先生のメッセージにある８つの徳目、つまり、尊敬（respect）、責任感（responsibility）、忍耐強さ（perseverance）、奉仕（giving）、自己統制（self-discipline）、正直さ（honesty）、共感（compassion）、勇気（courage）である。各子どもたちに、この徳目を明記したマジックシートを配

り、いつでも目に触れるように置くことを薦めている。また、各クラスや図書館、その他には、この徳目に関するポスターが至る所に張られている。そして、ポスターには、徳目にふさわしい写真が掲載されているだけでなく、具体的な例文が豊富に記載されている。この徳目の言葉は抽象的で難しいけれども、子どもたちでも理解できるような配慮がなされているのである[4]。

以下に、Boyer(1995)が記した、これらの徳目の内容を紹介する。その際、徳目についてはポスターに記載されている具体的な例文を「 」書きで紹介する。

①**尊 敬**：他者の意見や要求を却下したり、粗末に扱うのではなく、デリケートに答える。 個人間の違いは、社会を豊かにするものであり、祝福されるものである。各人は個人の自由を主張する一方で、グループや他のメンバーの立場にも敬意を払う。

「誰にでも親切に接する努力する」

「他者がどうしたら喜ぶか想像できる」

「他者の個性、属性に注意深くなる」

②**責任感**：自分が引き受けた仕事、承諾した仕事は喜んで義務を果たす気持ちを育てる。仕事は責任を持って良心的にやる。他者に気持ちよく、援助を求めることもできる。

「自分の約束を果たす」

「間違いをしたら、素直に認める」

③**忍耐強さ**：目標に向かって、心をしっかり持って、勤勉に努力する。いったん始めた仕事は最後までやる。仕事は大変なので、他のメンバーは喜んで他者を援助する。

「やり始めた仕事は最後までやる」

「一生懸命やる」

「他者と協力する」

④**奉 仕**：人生の最大の満足感は、他者への奉仕によって得られることを発見する。人の才能は、サービスを通してみんなで共有すると豊かになれることを認識する。人に頼まれるのを待つのではなく、報酬は期待しないで、他者の要求に積極的に答えることができる機会を探す。

⑤**自己統制**：自分自身を自分で統制する。また、誰もみな、成長段階による制限、個性という制限の中で生きていることを認識する。最も単純なレベルでは、よい生活習慣を身に付けることである。

「自分の手、足、物を自分で統制できる」

「順番を守り、他者を待つことができる」

⑥**正直さ**：各個人は注意深く、誠実に自分の責任を果たす。他者の仕事にけちを付けずに、自分の責任を注意深く、誠実に果たす。悪いところがあれば進んで認める。どんなひとも、人はすべて頼れる人であるという確信を持って、自分自身をオープンにして、みんなで共有する。

---

[4] この小学校では、徳目以外にも子どもたちの人人格形成を促すようなポスターを数々張っている。８つの徳目以外で著者が気づいたものを資料４に示している。

「誰にでも、完全、真実な情報を与える」
「自分の誤りを認め、悪いところは良くなるように努力する」
「今日は真実を話しましたか」

⑦**共感**：人はみな、思慮深く、注意深い。過去から現代まで、人は傷つき、混乱し、腹を立て、悲しんできた事実がある。このような面を無視するのではなく、互いに手を差し伸べあう。葛藤がある状態では、とにかく和解の方法を捜し求め、たとえ相手が悪い場合でさえ、互いに理解し合うように努める。

「援助が必要な人を助ける」
「他者をからかわない」
「違いがあってもよく、それは何の問題もないことを忘れない」
「あなたが気遣っていることをどのようにして他の人に示しましたか」

⑧**勇気**

「それが簡単なことでなくても、正しいことをやる勇気を十分に持っている」
「他者に同じだと励ますことができる」
「他者のよいところを探すことができる」

この徳目のすばらしさは、その内容が文化や人種を超えてどんな人にも役立つものであることである。加えて、どの内容にも、「自己主張」に加えて、「他のメンバーの立場にも敬意を払う」「喜んで他者を援助する」というような、「他者への配慮の仕方」が記載されていることがすばらしい。この点、日本の教育では、自己主張とセットになった他者への配慮への教育が不足しているのではなかろうか。

加えて「尊敬」に関しては日米の違いを感じた。日本では「親」「先生」など、目上の人が対象であり、年齢に関係なく誰にでも敬意を払うと言う意識が希薄である。しかし、この徳目に見られるように、どんな人にでもある程度の敬意を持って接するのは、人間として基本的なことなのではなかろうか。「敬

資料４　：　徳目以外の人格形成啓蒙ポスター

＜体育館＞Discover our future（未来を見つけよう）
Share and discover（共有と発見）
Kindness is the key（親切は鍵である）
Bridge minds to a bright future（心の橋は未来への橋になる）
Together everyone accomplishes more（他の人と一緒にやると多くのことがやれる）

＜２年生のクラス＞
Cooperation; do you help out today?（協同：今日は誰かを援助しましたか？）
Friendship; were you a good friend today?（友情：今日は誰かのよい友達でしたか）
Generosity; do you give to others today?（親切：今日は他の人に何かを与えましたか）
Acceptance; do you accept and respect children?
（受け入れ：子どもを尊敬して受け入れましたか？）

意」対するこの日米の違いに気づいた時、日本の学校や家庭で当然として行っている伝統的価値観も、大きな視点からの捉え直しが必要なものがあるかもしれないと気づかされた。

Boyer(1995)によると、これらの徳目[5]は、次のような考えが基本となって設定されている。つまり(1)卒業後も役立つような、個人的な責任、市民としての責任の感覚を発達させること、(2)より親切で温かく、より責任感ある社会を作るために必要で、かつ、家庭でも学校でも共通している人格特性、(3)勇気と判断を学ばせること。勇気と判断を学べなかったら、子どもは決して満足する生活を送れない。暴力等をストップさせることもできない。学問でさえ、倫理的、道徳的な特性が最優先されるのである。

これらの３つの基本姿勢には、学問でさえ道徳徳目抜きには考えられないことを認識して、道徳徳目を中核に据え、家庭と、学校と、地域で子どもたちを健全に育てていこうという姿勢が見られる。

ところで、この小学校では、各教科の授業の内容までこれらの徳目と一貫している。Boyer の「４つの C」の一つである「一貫性」が徹底しているのである。以下にいくつかの具体例を紹介する。

(5) 小学校での実践

①徳目の授業

まず、小学校１年生から５年生まで、新学期の始めに徳目について勉強する。学校が絵日記式のノートを用意しており、各ページに１つづつ、徳目が書いている。それらの徳目について、どんなことが考えられるか、どんな事ができるのかについて、クラスでディスカッションした後、自分がやっていること、今後やろうとしていることを絵と文章で表現する。そして、徳目について学習した後、資料５に示す小学校の誓約書の内容を理解して同意するのである。

資料５ ： トマホークリッジ小学校の徳目への誓約

- 私は、正直に、責任を持って、自分で自分をコントロールしながら行動することを約束します。
- 私は毎日、できる限り多くのことが学べるように学校の活動をし、課題が難しいときは勇気とチャレンジ精神を見せることを約束します。
- 私は、他者と共同作業をしたり、遊んだりするときは、敬意を持って、共感して、注意深く他者と接することを誓います。

② 音楽（４年生の音楽発表会）

４年生のクラスで、家族を招待しての音楽発表会があった。日本にもこの種の試みはあり、私も何度か参加したことがある。日本の発表会では、教科書に掲載されている代表的な歌を、歌や器楽演奏で演奏してみせる。しかし、この学校の発表会は全く違っていた。まず、楽器の演奏がなく、歌だけであった。しかし、最も驚いたのは次の２つの点である。それは手話の歌があったこと、加えて歌の内容が、日本のように、日本の代表的な歌、季節感のある歌ではなく、この学校の徳目に一致するような、自己形成を促す歌だったことである。中には、４年生と言う成長段階に合わせた「アイディンティティ（自己の確立）」という歌もあった。日本の学校教育を受けてきた私は、手話は全く知らないし、アイディンティティについて考えさせられたこともなかった。このへんにも教科教育と行事と徳目の一貫性が見

[5] Boyer は、改革前のアメリカの学校教育がうまく行かない原因を次のように考えた。①決まりきった硬直したスケジュール、②子どもたちの学びに制約を与え、教育の限界を作るる貧弱な教育環境、③子どもたちにどのような徳を教えて良いのかで混乱し、倫理的、そして道徳的な道標が欠けている点、である。この③から徳目が生まれたのである。

て取れるのである。

資料６にこの時の発表会で歌っていた歌のすべてに付いて、１番の訳を示す。

資料６　：　４年生の音楽発表会の歌

歌１：Proud（誇り）

数十億の人たちが、肩と肩を寄せ合って、私たちの地球に一杯に、日に日に成長し、年を取りながら暮らしている。みんな同じ太陽を見ながら。同じ風を感じながら。私たちはみんな違う。そして私たちはみんな同じなのだ。数十億の顔があり、数十億の名前がある。つまり、私たちは不思議なもの(magical)。雪が地球に降ってくるように。個人個人は違っている(individual)。

私は私に誇りを持っている。私の誇り。私がやろうとしていることへの誇り。私がやっていることへの誇り。私の人生は私のもの。私は自分の人生への力を持っている。私は自分の真鍮のリングに手を伸ばし、それを自分のために引くことができるのだ。

歌２：On the day I was born（私が生まれた日に）…手話を含む歌

私が生まれた日、地球は回っていた。私が生まれた日、空気は地面まで満ちていた。私が生まれた日、太陽は空にあった。私が生まれた日、世界は愛に満ちていた。

そして動物が「こんにちは、あたながここにきて嬉しいよ。あながた生まれてきて本当に嬉しい。みんなあなたを大歓迎だよ」と言った。

歌３：Identity（自分らしさ）

誰も私の場所に立つことは出来ない。立てるのは私だけ。誰も私が感じ、私が見たものを知ることは出来ない。誰も私のやり方でものを作ることは出来ない。私の文化、私の国、私の学校、私の友達、私の家族。アイディンティティは私の世界だ。私自身のアイディンティティは私だけのもの。みんな知っているように、私のアイディンティティはひとつの事実なんだ。以前の私、今の私、そして未来の私にとって。

歌４：Teach me well（十分に教えて）

私は責任感と正直さを学ぶことが出来る。私は誇りと尊厳を学ぶことが出来る。私は私自身、そして他の人を尊敬することが出来る。私は、あなたが教えてくれたら、これらを学べるんです。……

歌５：I'm a citizen of this world（私は世界の市民）

私は地球にすんでいる多くの人間の一人。私は自分の役割をまじめに果たす。私は進み行く未来の一部分。私は、すべての、みんなの、いろんな場所の一部分。私はここ、私は一部。私はこの世界の一市民。

③　理科

２年生の理科の授業で、動物について学ぶ授業があった。その時、導入として家で飼っているペットについて意見を交換する場面があった。そこまでは導入として普通である。ところが次に、「ペットに対して、あなたの責任感は何か」との問いかけがあり、生徒がそれぞれ、それを文章で表現する課題があった。日本では、子どもに文章を書かせるのは「日記」であることが多い。その場合、「何を書こうか」というところでまず躓いてしまう。しかし、この方法だったら、ペットの世話をしている子は難なく書ける。加えて、ペットの世話をすることも、徳目の「責任感」に通づると実感できるのではないかと思った。

④　算数

２年生の算数のクラスでは、足し算、引き算の授業が行われていた。しかし、その教え方が日本とまるで違っていた。日本では、とにかく、早く、正確に計算できるようになることを重視する。その結果、計算問題は、一つの正しい答えを求る早さを競うゲームとなる。ところが、アメリカの小学校では、「＝(イコール)」の概念を教えることを通して、加法、減法を教えていた。資料７に、このときの教師の

板書の一部を示す。つまり、どんな複雑な組み合わせを作っても「＝（イコール）」になる関係が成立することを丁寧に教えていたのである。

この教え方には、やはり徳目が反映しているように思える。日本のやり方では、「答えは１つ」「方法は１つ」しかない。しかしアメリカのやり方は、「どんなに違っても、どんなに複雑でもイコールです」と暗に教えているように思える。つまり、「人はどんなに見かけや考えが違っても「イコール」なのです」ということを、算数の計算を通して教えているように思えるのである。このように考えると、日本の算数教育は、「答えは１つです」から「価値基準はひとつなのです」という発想を暗黙のうちに植え付けているのかもしれないと気ずかされた。

資料７：算数の計算問題

7+3=10+0
10　10

7-3=2+2
4　4

4+8=16-4
12　12

6+6=13-1
12　12

4+8=16-4
12　12

9+3=13-1
12　12

7+6=8+5
13　13

10+8=18-0
18　18

⑤　教科外活動の評価

この学校にも、当番のような仕事がある。そのような活動の評価がまた、この徳目で評価されるのである。資料８に示したのはそのシートである。担当の先生、いろんな係りの先生が、徳目を書いた紙を持っており、自分の名前と子どもの名前を書いて、子どもの仕事ぶりを徳目に沿って評価してわたすのである。娘は昼食当番、図書の当番の時にこの紙をもらってきた。通信簿でも教科の評価以外、つまり日常生活の評価はこの徳目が評価基準となっていることを付け加えておく。

このように、この学校の核となる徳目は、言葉だけでなく実行によって教えられている。カリキュラムを通して、学校の気風を通して、教科を通して、学校で学んだこれらの美徳を学校から家庭、地域社会まで応用するように勇気づけられるのである。

資料８：教科外活動の評価表

TOMAHAWK RIDGE TRAILBLAZER
VIRTUE CERTIFICATE
Name Yoshiko Aoki
Displayed
○ Responsibility　○ Self-Discipline
○ Respect　○ Honesty
○ Perseverance　○ Compassion
○ Giving　○ ＿＿＿＿
Noticed By NE 4-8-99

(6) まとめ

アメリカに比して、日本は学校教育を通して作りたい人間像が明確でないように思える。このため日本では、カリキュラムやその目標は教科ごとには存在するが、教科を越えたカリキュラムや教育目標は明確でないように思える。アメリカの学校教育における「徳目」のように、教科と教科、教科と教科外活動、学校と地域、などを結びつける接着剤のような倫理感が日本にも必要なのではなかろうか。

日本でも教育改革が進み、その一貫として総合学習が導入され、国際性、環境、その他のモデル案が出されている。しかしどのモデルであれ、その中軸となるような徳目が必要なのではなかろうか。どの

ような人間になって欲しいのか、どのような人間を育成するのか、その最終ゴールを明確にしなければ、どの取り組みも、収集のつかない「拡散」で終わってしまうと危惧される。

最後に、Boyer(1995)の言葉を引用して、本稿は終わりにしたい。

「世界は変化している。だから学校も変わらなくてならない。今の子どもたちは、20 世紀ではなく、21 世紀に生きて行くのだから」。

＜参考資料＞

(1)「Just the facts; a quick reference for information about Blue Valley Schools 1999-2000」.Community Relations Office in Overland Park, Kansas.

(2)「Tomahawak Ridge Elementary School 1999-2000, Blue Valley USD 229, "Shooting for the Stars in the Next Millennium"」

(3)Tomahawk Ridge Elementary School 1999-2000, Blue valley USD229 "Shooting for the Stars in the Next Millennium"

(4)Boyer, E.(1995) The basic school; a community for learning. California; Jossey-Bass Inc.

(5)村田鈴子（1997）「アメリカの教育」信山社